

David Copperfield におけるダニエル・ペゴティーの道徳性

吉田 一穂

1. 作家の自伝的側面

David Copperfield (1850) は、ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の 8 番目の小説であり、一人称の語り手の最初の物語である。ブラッドベリー・アンド・エヴァンズ (Bradbury and Evans) 社によって月刊 20 冊で出版されたこの作品は、フォースター (Forster) を初め多くの人々にディケンズの傑作と考えられている。作品は、ディケンズの「お気に入りの子供」(1867 年序文) であり、他のどの小説よりも彼自身の人生のできごとに直接的に依存している。

David Copperfield は、ディケンズの自伝的部分を多く反映しているが、1849 年 1 月ディケンズは、作品執筆にあたり、グレート・ヤーマス (Great Yarmouth) を訪れ、その漁師たちと話をしている。ディケンズは、フォースターにヤーマスが世界中で最も風変わりな場所であるという印象を述べ、2、3 週間でペゴティー (Peggotty) 一家を作り出した。いわば、ペゴティー一家は、ディケンズの想像の産物であるが、自伝的部分の多いこの作品の中で特異な印象を与えている。とりわけ、ペゴティー一家が暮らしている「船の家」は、現実離れた感さえある。

しかし、作品の構造を考えた場合、ペゴティー一家の住む「船の家」は無視することのできない重要な役割を果たしている。ポール・デイヴィス (Paul Davis) は、*David Copperfield* が注意深く念入りに仕上げられた統一感のある小説であると述べているが、¹「船の家」は、作品に統一感を与える上で効果的に用いられている。どのような意味で統一感を与えているかと言うと、家庭の崩壊と再生を暗示し、登場人物の道徳性と関連性を持つという意味である。家庭の崩壊と再生ということに関し、忘れてはならない作家の自伝的側面がある。ディケンズは、*David Copperfield* の第 11 章に自身の辛い子供時代を描きこんでいる。デイヴィッド (David) は、マードストーン・アンド・グリンビー (Murdstone and Grinby's) 商会でこきつかわれる、下働き小僧になるが、このことは、作家の少年時代の靴墨工場での惨めな体験に基づいている。ディケンズは、12 歳のとき、ストランド (Strand) のハンガーフォード・ステアーズ (Hungerford Stairs) にあったウォレン (Warren) 靴墨工場へ働きに行かなければならなくなった。さらに、父親ジョン (John) の借金が原因で家族は監獄に投獄され、チャールズは、家族と離れ離れとなって暮らさなければならなくなった。このことは、鋭敏で学問で身を立てようとしていた少年に筆舌に尽くし難い苦悩と絶望感を与えたが、ディケンズのこのときの心境は、*David Copperfield* においてデイヴィッドが語る小僧という地

位からくる屈辱感や情けない気持ちに読み取れる。靴墨工場での体験は、ディケンズがいかに家庭が重要であるか、また、父親の存在がいかに家庭の中で重要であるか、子供の立場から知るきっかけとなったできごとであったと考えられる。*David Copperfield* においてデイヴィッドが初めて「船の家」を訪れるのは、彼自身の家庭の危機、すなわち、マードストーン姉弟が介入してきて母親とペゴティーとデイヴィッドの平和な家庭が崩壊する危機にあるときである。さらに、次にデイヴィッドが「船の家」を訪れるのは、母親が亡くなった後である。母親が亡くなって孤児となったデイヴィッドに対し、ペゴティー氏は、エミリーとハムも孤児だと言って慰めるが、デイヴィッドは、「小父さんみたいな人に後見してもらえるんなら、私だって、孤児みたいな気持ちなどしないでしょうがね」(141) と言う。このことから、かつての靴墨工場において感じた気持ちが、「もし神様の恵みがなかったら、いくら周囲からの世話ががあったとはいえ、とっくに泥棒か、浮浪児にでもなっていたことだろう」(161) と語られる自伝的作品において、「船の家」と「船の家」の主人であるペゴティー氏によりディケンズが家庭と父親の重要性をはからずも示していると言えよう。

「船の家」の主人ペゴティー氏に関し、バート・G・ホーンバック (Bert G. Hornback) は、*"Noah's Arkitecture": A Study of Dickens's Mthology* の中で、「ペゴティー氏は、神話的救済者ではなく、慈善の心に富んだ男性である」と述べているが、² デイヴィッドの家庭が危機に瀕しているとき、「船の家」の慈悲深い父親として現れたり、作品の最後に現れて、デイヴィッドに「船の家」の構成員の近況について語る場面を考慮すると、全知者 (the Omniscient) である作者がプロットを円滑に運ぶため、意図的に用いた人物と言えるかもしれない。また、ポール・デイヴィスが、「スティフォースの見下すような態度と他者の利用は、ダニエル・ペゴティーの無私無欲と愛と対照をなしている」と述べているように、³ ペゴティー氏は、他の登場人物と比較することにより、道徳性という観点からとらえることのできる人物である。本論文では、「船の家」の崩壊と再生という過程をたどり、ペゴティー氏の家庭の中における役割を考慮することにより、ペゴティー氏が道徳性という観点から作品においてどのような役割を果たしているかについて述べてみたい。

2. デイヴィッドの目に映った「船の家」

デイヴィッドが初めて「船の家」を見るのは、ペゴティーがヤーマスに住む兄のペゴティー氏のところにデイヴィッドを連れて行ったときである。ハムが「船の家」を案内した際、デイヴィッドは自身の「船の家」に対する印象を、「あの家に住むという、この浪漫的な考えには、もしそれがアラディンの宮殿、ロックの卵であったにしても、こうまで私の興味をそそることはなかったであろう」(30) と語っている。家は船の胴腹がくりぬかれていて、入口が一つついていて、屋根もちゃんとふいてあり、小さな窓までいくつかついていて、デイヴィッドは、この家が本物の船であり、かつては海の上に浮かんでいて、陸上の住家として造られたものでないはずだ、と想像し、すっかり魅了されてしまう。

このように、デイヴィッドは「船の家」に大変な魅力を感じているが、家の中に入ってデイヴィッドは、四方の壁に聖書の話を書いた安物の彩色画がガラス入り額縁に入っていることに気づく。注目に値することは、真っ赤なアブラハムが青服のイサクを犠牲に連れて行くところの絵や、黄色いダニエルが洞窟の中で緑色の獅子たちに囲まれている絵にデイヴィッドが強い印象を受けていることだ。

アブラハムがイサクを犠牲に連れて行くところの絵は、創世記第 22 章に基づく絵である。創世記第 22 章において神は、アブラハムを試みて、「あなたの愛するひとり子イサクを連れて、モリアの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい。」と言う。アブラハムは、神の示した場所に祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せる。そして、アブラハムが手を差し伸べ、刃物をもってその子を殺そうとしたとき、主のみ使いが、「わらべを手にかけてはならない。また、何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえわたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは知った」と言う。(Genesis 22 : 1-12) この話は、アブラハムが神の目から見て正しい人物であることを意味する。

また、ダニエルが洞窟の中で獅子たちに囲まれている絵は、ダニエル書第 6 章に基づく絵である。ダニエルは、30 日間、ダリヨス王以外に神に願いごとをしてはならないという禁令にそむき、ししの穴に投げ込まれるが、ダニエルに罪のないことが神の前に認められ、彼は、ししの害を受けずにすむ。この話もまた、先の話と同じようにダニエルが神の目から見て正しい人物であることを意味するが、神の前には、身分は関係ないという意味をも含んでいる。⁴ デイヴィッドが強い印象を受けるこれらの彩色画は、作品において道徳性という観点から重要な役割を果たしていると考えられるが、「船の家」のノアの箱舟としての意味が鮮明になるとき、彩色画はノアの箱舟と密接な関わりを持つことになる。

ディケンズは、ペゴティー氏にデイヴィッドが尋ねる質問、「ハムって名前ね、小父さんが箱舟にでも住んでいたから、つけたわけ？」(32) により、ノアの箱舟を読者に印象づけている。ハムは、ペゴティー氏の溺死した兄のジョー (Joe) が自身の息子につけた名前なので、ペゴティー氏は質問に答えられないが、ここでディケンズが意味していることは、創世記において箱舟に乗って逃れたノアの 3 人息子の一人がハムであることにより、「神の目から見て正しいかどうか」ということを印象づけることであると考えられる。なぜなら、創世記第 6 章において、世が神の前に乱れて暴虐が地に満ち、神は全ての人を絶やそうと決心するが、第 7 章において神はノアに、「あなたがたと家族とはみな箱舟に入りなさい。あなたがこの時代の人々の中で、私の前に正しい人であると認めたからである、」(創世記 7:1) と言うからである。このことから、ディケンズが「船の家」を登場人物の道徳性を示す象徴的存在として用いたと言っているだろう。

この「船の家」の主人がペゴティー氏であり、彼は、デイヴィッドや身寄りのない甥や姪、ハムとエミリーの父親代わりをつとめている。ハムの父親だけでなく、エミリーの父親もまた海で溺死している。ハムはペゴティー氏の兄ジョー (Joe) の息子であり、エミリー

ーは、ペゴティー氏の義弟トム (Tom) の娘なので、ペゴティー氏は二人の世話をすることになったのである。エミリーがデイヴィッドに語る「海って随分ひどいわよ。随分ひどい目にあった人、わたし、知ってるもの。わたしたちのお家くらいある船がね、粉微塵になるところだって見たわよ。」(34) という言葉は、彼女の海への恐怖を表しているのみならず、彼女の住んでいる「船の家」の未来をも暗示しているかのようである。エミリーは、自身が「あんたのパパは紳士だし、ママも立派な奥様なのねえ。でも、私のパパは漁師だったし、ママも漁師の娘だったわ。それに伯父さんのダン(ペゴティー氏のこと)まで漁師だわ」(34-5) と語るように、デイヴィッドとの階級の違いを認識していて、貴婦人になることを夢みている。貴婦人になれば、海で死ぬこともないし、金で貧しい漁師たちを助けることができるからである。デイヴィッドは、自身のそばから駆け出し、相当の高さで海の上にかかっている手すりも何もないでこぼこの材木の上に軽々と駆けていくエミリーに強い印象を受け、隠れた啓示のようなものを感じ取り、その朝、自分の目の前ですっぽり海中に没してしまった方が、むしろエミリーにとっては、幸福ではなかったかと語っているが、この語りは、後のエミリーの運命、すなわち、スティアフォースとの駆け落ちと悲劇的結末を暗示している。注意すべきことは、「船の家」訪問がデイヴィッドにとって定期的に彼自身の家庭の危機にあることである。デイヴィッドが家に帰ると、新しい父親マードストーンが家庭に介入してきて、ペゴティーと母親と彼の3人の平和な家庭がおびやかされることになるからである。デイヴィッド、エミリーとも人生初期の楽園が守られ続けないことを考えると、家庭という観点からディケンズは、デイヴィッドの家庭とエミリーの家庭を関連づけていると言える。

新しい父親マードストーンが介入してきて以後、デイヴィッドは安住の場所を失ってしまう。マードストーンは、姉と結託して、家の古い秩序—デイヴィッドと母親とペゴティーの楽園を破壊する。ジュリアン・シモンズ (Julian Symons) も指摘しているように、デイヴィッドの継父であるマードストーンは、宗教と精神修養の名にかけて子供を打ち圧迫する暴君と言ってもいい人物である。⁵ デイヴィッドはマードストンの信仰については、暗いものであり、峻厳であり、怒りに満ちたものであった、と説明し、彼の信仰の暗さについては、彼の性格の激しさからくる必然の結果とも言えるものであり、とにかく何か少しでも理由があれば、どんな厳しい刑罰でも平気で科するといったふうであったと説明する。デイヴィッドは、また日曜日の教会出席に関して恐ろしいマードストーン姉弟を表現する。日曜日に教会に入る際、デイヴィッドはまるで監視つきの囚人が苦役にでもつくように、家族席に入って行き、その後から、まるで柩覆いでも作ったような黒ビロードのガウンをつけたミス・マードストーンが続く。連祷の際「哀れなる罪人たちよ」とミス・マードストーンが唱えるとき、彼女は全会衆を罵倒してでもいるかのように真っ黒な目をむいて、教会中を眺め渡す。母親は、マードストーンとミス・マードストンの間にはさまって、両方の耳から、低い遠雷のようなつぶやきを聞かされながら、おどおどと唇を動かしている。このような光景を目の当たりにし、デイヴィッドは、善良な老牧師の方が間違っていて、逆にマード

ストーン姉弟の方が正しいのではないか、また、天国の天使という天使は全て「死の使い」(52)なのではないかという不安を持つ。ディケンズは、デイヴィッドの子供の感受性によって、マードストンの宗教が脅威に満ちた宗教であるだけでなく、自己を肯定するために他者を否定する傲慢な宗教であることをも示している。寄宿学校に入る前、デイヴィッドは、母親を名目上の先生として勉強することになるが、この勉強はマードストーン姉弟の監視のもとで行われる。母親の授業の後、デイヴィッドはマードストーンによって彼には難解な算術の問題を課せられたり、ミス・マードストーンに仕事をさせられたりする。デイヴィッドは、自身の状態を「二匹の蛇に魅入られた哀れなひな鳥」(55)にたとえる。デイヴィッドは同じ年頃の子供たちと遊ぶことはなかったと語るが、それは次の引用に見られるようなマードストーン姉弟の恐ろしい神学によるものだ。

As to my recreation with other children of my age, I had very little of that; for the gloomy theology of the Murdstones made all children out to be a swarm of little vipers (though there was a child once set in the midst of the Disciples), and held that they contaminated one another. (55)

同じ年頃の子供たちと遊ぶことなどは、まずほとんどなかった。というのは、マードストーン姉弟の恐ろしい神学によれば、いずれ子供たちなどというのは小毒蛇の集まりであり(もっとも、昔キリストの弟子たちの真ん中へさえ、一人引き出された子供はいたはずだが) お互い毒しあうに決まっている、というのだったからだ。

この引用における「もっとも、昔キリストの弟子たちの真ん中へさえ、一人引き出された子供はいたはずだが」という箇所は、マルコによる福音書第9章第36節への言及である。イエスは、一人の幼な子を取りあげ、弟子たちの中に立たせ、それを抱いて、「誰でもこのような幼な子の一人をわたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。そしてわたしを受け入れる者は、わたしを受け入れるのではなく、わたしをおつかわしになったかたを受け入れるのである。」(Mark: 9:37) と言う。聖書のこの部分の引用により、ディケンズは、マードストーンの子供を邪悪なものとする神学が、新約聖書におけるイエスの教えを無視した神学であることを強調している。フィリップ・コリンズも述べているように、マードストーンは、むち打ちで印象づけられるカルビン主義者にとらえることができよう。⁶後に医者の子リッパ(Chilip)先生が「あの二人の言うことに新約聖書に基づくよりどころなんて、そんなものは決してないと思うんだが」(834)と二人の信仰について説明しているが、彼の言葉は、マードストーンが傲慢のはげ口として信仰を利用している人物であることを示している。

ある日、勉強ができないで打たれそうになるとき、デイヴィッドは勉強はしたけれども、マードストーン姉弟の監視のもとではできなくなると訴える。デイヴィッドの言葉を聞いた

マードストーンは怒りをあらわにし彼を打とうとするが、このとき思わずデイヴィッドは自分を押さえていたマードストーンの手に噛み付く。このデイヴィッドの行為は、本能的な行為であり、彼の自分の環境を変えたいという願望の表れとっていいだろう。この結果、デイヴィッドは、打たれた後部屋に5日間監禁され、寄宿学校では「ご用心かみつきます」という張り紙をつけられることとなる。

キンケイド (James R. Kincaid) は、「家での位置が、かわいがられてとても愛された子供から犠牲にされ孤立した捨てられた子供になるとき、デイヴィッドは、自分自身に対し、そしてマードストーン一家に対し人間以下となる。ついに、マードストーンは、デイヴィッドに「ご用心かみつきます」と書かれた張り紙をつけることにより、非人間化を完成する。」と述べる。キンケイドの述べるように、⁷ デイヴィッドは、マードストーン姉弟の介入により、幸せな楽園から一転して人間以下の位置に置かれるが、彼の母親の死後、ペゴティーに一週間ほど兄のところへ行くとき、彼も同行することを提案され、願ってもない話だと思う。マードストーン姉弟の介入により精神の監禁状態に置かれていたデイヴィッドは、「船の家」の純朴な人々に囲まれている自分を想像したり、エミリーとの散歩を思い出し、周囲の人たちとの環境が一変することを期待する。注目すべきことは、「船の家」が、新たに孤児となったデイヴィッドだけでなくデイヴィッドが孤児になる前から孤児であったエミリーにとっても、楽園と言ってもいい場所であることだ。ペゴティー氏は、デイヴィッドに対する継父のマードストーンと対照的に、まるで実の娘のようにエミリーをかわいがるからである。両者にとってペゴティー氏は、厳しい現実から孤児に避難場所を提供する慈父のごとき存在であると言ってよかろう。しかし、エミリーにとって楽園と言ってもいい「船の家」は、身分違いのスティアフォースが介入してくることにより、崩壊へと導かれる。次に、スティアフォースのエミリー誘惑と駆け落ちがペゴティー一家にもたらした悲劇について考えていきたい。

3. 「船の家」の崩壊

エミリーは、ずっと貴婦人になるという願望を持っていたが、幼なじみのハムと婚約する。ハムは率直で誠実、ばか正直と言っていいほどのお人好しの船大工であり、紳士階級とは無縁の人物である。他者の介入がなければ二人は結婚するはずであった。しかし、第21章でスティアフォースが「船の家」を訪問してから、エミリーの運命は暗転することになる。第21章でスティアフォースが「船の家」でする難破船の話と第22章でスティアフォースが暖炉の火の前でデイヴィッドに言う言葉、「荒れたこの家の様子からみると、いずれは散り散りになるか、死んでしまうか、それとも、何だか知らぬが、とにかく、気の毒なことになるんじゃないかねえ。」(322) は、「船の家」の未来を暗示しているかのようである。⁸ 注目すべきことは、「船の家」崩壊を予測したスティアフォースが、自分という人間は、指導が必要であり、自分を導いてくれる父親がいてくれたらよかったのにと語ることだ。

このことにより、ディケンズが「船の家」を崩壊に導くエミリーの誘惑といったステアフォースのエゴイスティックなふるまいの根本的な原因が父親不在にあると暗示していると考えられる。

フィールディング (K.J. Fielding) が指摘しているように、⁹ 息子が何も拒否されたことがないというのが、ステアフォース夫人の誇りであり、また、ジュリエット・ジョン (Juliet John) が指摘しているように、ステアフォースの母親は、堂々とした英雄的な役割を演じさせるべく息子を育てたと言っている。¹⁰ ステアフォース夫人は、下の階級の間があるセイラム・ハウス (Salem House) のような二流のパブリック・スクールを選択した理由として、勝気な息子の気性をあげ、「あそこへ入れたおかげで、あの子の勝れた素質は、一種自発的な競争心と申しますか、それと、はっきり意識した自負心とで、一層伸ばされたように思いますのよ」、「何にあれ、もしあれが制肘でも受ければ、きっと反抗したと思いますのよ。でも幸い、あそこで王様みたいなことになってしまったものですから、そこは自尊心で、自分でも王様らしく、立派にふるまうつもりになったらしいんですの。いかにもあの子らしいところでしてね。」(296) というが、彼女は、息子の道徳的欠点を十分に認識していない。彼女は、あわれな助教師メル (Mell) 先生をクビに追いやり、ローザ・ダートル (Rosa Dartle) に一生消えない傷を負わせ、エミリーを誘惑して「船の家」を破壊した原因となるステアフォースのエゴイスティックで残酷な側面を改善しようとはせず、勝気な気性をそのまま肯定するような環境に息子を置こうとするが、彼女の教育方針は、後の息子の運命に悲劇をもたらすこととなる。ステアフォースの悲劇は、ステアフォース夫人が、息子の性格、すなわち、わがままでエゴイスティックな性格を改善しようと努めなかったがゆえに、息子が自制心なく行動し、自ら招いた悲劇と言えるのだ。ステアフォース自身も自身の性格的弱点を、認識していて、「ぼくは、この 20 年ほど賢明な父親がいてくれたらよかったと、ほんとにそう思うんだよ」、「ぼくという人間はもっと指導が必要だったんだよ」(322) とデイヴィッドに語ることから、ステアフォースの悲劇は、父親不在がもたらした性格弱点悲劇と言ってもいいものである。

一方、エミリーの方はというと、ハムへの手紙に「あの方が私を淑女にして、連れて帰ってくださるまで、二度と、帰って来ることはございません」(452) と書き、自身の裏切りを心苦しく感じていることを伝えていることから、彼女の道徳心も淑女になる願望に負けてしまったのである。ステアフォースとエミリーの身分違いの恋は、二人に悲劇をもたらす。ヤーマスを出て以来、フランスやイタリアなど外国旅行をする二人であったが、結局うまくいかなくなり、ステアフォースがナポリ近くの別荘を出てエミリーを残すことで、両者は別れ別れとなる。彼の使用人リティマー (Littimer) が第 46 章でデイヴィッドに語るエミリーが船頭たちやその子供たちと仲良くし、子供たちに、「もともと自分は船頭の娘なので、昔は、故郷で、あんた方と同じように浜を歩きまわったこともあるのよ」(670) と言って、ステアフォースが気分を悪くしたという話は、両者の階級差が両者の仲を引き裂く一因であることを示している。

手紙からエミリーの決意を知ったペゴティー氏は、世界じゅう歩いてでも、エミリーを捜しだす決意を伝えるが、それに対しガミッジ (Gummidge) が言う言葉に注目したい。

‘Sit ye down, and give me your forgiveness for having ever been a worrit to you, Dan’l—what have my contrairies ever been to this!—and let us speak a word about them times when she was first an orphan, and when Ham was too, and when I was a poor widder woman, and you took me in. It’ll soften your poor heart, Dan’l,’ laying her head upon his shoulder, ‘and you’ll bear your sorrow better; for you know the promise, Dan’l, “As you have done it to unto one of the least of these, you have done it unto me”; and that can never fail under this roof, that’s been our shelter for so many, many year!’ (454)

「まあ、そこへ坐って、いろいろいままで厄介けてきたこと、みんな赦してねーわたしの不幸なんて考えてみりゃ、なんでもないことばかりなんだからね!それでダヌル、ちょっとばかり昔の話でもしようでねえかよ、ね。エミリーも、ハムも、まだ小っちゃな孤児で、このわたしも、哀れな後家暮らしだった。それでお前に助けてもらったんだが、そのときの話でもすりゃ、ダヌル、お前の気持も、ちったあ静まるだろうし、気もまぎれようってもんさね」言いながら、彼女は、じっと彼の肩口へ、頭を寄せる。「ほら、イエス様だって、おっしゃって下すただよ、ね、『汝等、この小さき者の一人になしたるは、すなわち我になしたるなり』ってね。絶対、まちがいはねえだよ、ね。もう何十年となく、わたしたち、雨風をしのいで生きてきたこの屋根の下で、あのイエス様のお約束だけは、まちがいはねえだからね!」

ここでガミッジが語る「汝ら、この最も小さき者の一人になしたるは、すなわち我になしたるなり」は、マタイによる福音書第 25 章でイエスが言う言葉に基づく言葉であるが、ガミッジの言葉は、孤児であったエミリーもハムも後家のガミッジも助け、自分を裏切ったエミリーを探し出そうとしているペゴティー氏が、隣人愛の持ち主であり、イエスの目から見て正しい人物であることを暗示しているかのようである。¹⁾マタイによる福音書第 24-25 章は、十字架にかけられた後の自身の再臨についてイエスが語っている箇所であるが、第 24 章では、どのように現れるかについて述べている。イエスは、「人の子の現れるのも、ちょうどノアのときのようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして、洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらっていくまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのもそのようであろう。そのとき、二人の者が畑にいと、一人は取り去られ、一人は取り残されるであろう。」(Matthew 24 : 34-41) と言う。このことから、ディケンズが「船の家」をノアの箱舟と関連づけ、登場人物が神の前に正しいかどうか暗示していると考えられよう。ホーンバックは、ペゴティー氏がノアでなく、ノアの息子であるべきハムには父親がいないと

聖書の場合との相違点を指摘しているが、^{1,2}「神の前に正しいかどうか」という観点から、あるいは、道徳性という観点から考えれば、ペゴティー氏は、必然性のある人物であり、作家の意図を十分果たしていると言えよう。

エミリーの手紙を読んだ後、ペゴティー氏はエミリー捜しの長い旅に出かけるが、デイヴィッドの目に映ったペゴティー氏は、ステアフォースと正反対の人物として描かれている。「船の家」を破壊してしまったステアフォースについて、デイヴィッドは、「悲しみのあまり、将来、最後の審判廷では、つい思わず、君のために、不利な証言をするようなことがあるかもしれない」(455)と語るが、デイヴィッドの語りは、ステアフォースが

友人の目から見ても、道徳性という観点から犯してはならない過ちを犯してしまったことを意味する。一方、淑女になるため自身を裏切ったエミリーをペゴティー氏はやさしく迎える決意をする。「船の家」を捨ててしまうのか、と尋ねるデイヴィッドに対し、ペゴティー氏は、エミリーが戻ってきたときのためにそのままの状態に残しておくと言う。第31章でペゴティー氏は、デイヴィッドとともにステアフォース夫人を訪ね、約束(結婚のこと)を守ってくれるか問いただが、ステアフォース夫人は、ステアフォースとエミリーが身分違いであり、ステアフォースを教育もなく世間のことも知らないエミリーと結婚させるわけにはいかない、と言う。

ステアフォース夫人とペゴティー氏の違いは、ステアフォース夫人が卑しい娘エミリーを自身の体面のため認めない一方で、ペゴティー氏がいくらお金を積んでも取り戻したいエミリーが、ステアフォースと結婚して幸せに暮らせるならば、そのことに我慢すると言っていることだ。さらに、ステアフォース夫人が、エミリーと別れて頭を下げて謝ってこない限り、ステアフォースを家に入れないとやっている一方、ペゴティー氏はエミリーに関してなにもかも赦してやる、と言っている。ディケンズは、ステアフォース夫人とペゴティー氏を対照的に描くことによって、ペゴティー氏が無条件の愛情と赦しの心を持っていることを印象づけている。

作品の中でエミリーとステアフォースは、対照的な結末を迎える。エミリーが優しくペゴティー氏に迎えられる一方で、ステアフォースは悲劇的結末をむかえる。第55章におけるステアフォースを乗せた難破船の描写が彼の悲劇的結末を物語っている。一本のマストが根元から7、8フィートのところで折れ、舷側にぶつかる様や帆布がずたずたになりいまにも船体が真二つになりそうになる様は、希望に満ちたオーストラリアへの移民船と対照的である。嵐のため、「船の家」ははかなく吹き倒され、ステアフォースは、彼自身が破壊したその家庭の廃墟の中に眠ることになる。ノアの箱舟を暗示する「船の家」を翻弄するものは、*David Copperfield* においては、階級である。ステアフォースの誘惑に乗ったエミリーの動機が淑女になりたいという願望であり、その願望が原因で「船の家」は崩壊するからだ。注目すべきことは、ディケンズが、後の作品 *Great Expectations* (1861) でピップ (Pip) の運命とマグウィッチ (Magwitch) の運命を関連づけ、第5章でマグウィッチ

の乗る監獄船を「邪悪なノアの箱舟」(36)と表現していることだ。ピップは、作品の最初、監獄船から脱出したマグウィッチにやすりと食べ物を持っていくことにより、マグウィッチを助ける。マグウィッチは、その後、逮捕されオーストラリアに流刑の身となるのだが、かつて自分を助けてくれた子供に恩返しをしようと、巨額の金を送り続ける。囚人マグウィッチがオーストラリアで稼いだ金で紳士階級の仲間入りをし、ジョー (Joe) を疎んじる気持ちを持ってしまったピップであったが、管財人のジャガーズ (Jaggers) からその金の出所について説明してもらえなかったため、老資産家のミス・ハヴィシャム (Miss Havisham) が後見人であると早合点する。しかし、彼は、マグウィッチが自身の前に現れ、自身が乗っていた箱舟が崩壊したことを知り、自身の卑劣さに気づく。*Great Expectations* の例を考慮すると、ディケンズは、*David Copperfield* において、「船の家」をノアの箱舟と関連づけ、いかに階級をめぐる人間の思惑によって「船の家」が崩壊するかを印象づけていると言っ

4. オーストラリアへ向かう移民船

ディケンズは、*David Copperfield* において、「船の家」が崩壊する様を描写する一方で、オーストラリアへ向かう移民船により、崩壊の後再生するペゴティー一家を印象づけている。第 57 章において、オーストラリアへ向かう移民船は、ペゴティー一家だけでなくかつてデイヴィッドとともに貧困と闘った友人ミコーバー (Micawber) 氏の一家をも乗せて出発するが、ミコーバー氏と貧乏という苦難を共にしたミコーバー夫人は、最後にデイヴィッドにどんなことがあっても、あの人とは別れないと言う。彼女の言葉は、彼女が貞淑な妻であることを示しているだけでなく、彼女がスティアフォースの誘惑に乗ってハムを裏切ったエミリーや売春婦であったマーサと対照的な女性であることを示す言葉でもある。そして、忘れてはならないことは、エミリーとマーサが乗るオーストラリアへ向かう移民船が、転落した女性の再生と深く関わっていることだ。

作品において、ディケンズがエミリーとマーサをオーストラリアへの移民船に乗せ第二の人生を送らせることは、彼のユレイニア・カテッジ (Urania Cottage) の活動を思い起こさせる。ディケンズは、'fallen women'のためのこの矯正施設に多くの時間を費やした。この施設のアイディアは、現在の人生から逃れたいと切に望む街娼を施設に連れて行くことであつた。1847年から1858年にかけてディケンズはその施設の運営委員会を管理し、監督を引き受けた。¹³このことから、ディケンズがユレイニア・カテッジのアイディアを用い、結婚に適した女性とはかけ離れた存在であるエミリーとマーサをオーストラリアに移すことにより、¹⁴彼らに再生の機会を与えたと考えられる。¹⁵

作品の構造という観点から考えると、ディケンズは、第 55 章でスティアフォースの乗った難破船を描き、第 57 章でオーストラリアへの移民船を描いて、第 63 章で移民船に乗った人々の消息についてペゴティー氏に語らせていることにより、ペゴティー一家を崩壊に

導いたスティアフォースと再生するペゴティー一家を対照的に描いている。すなわち、ディケンズは、エゴイスティックなスティアフォースの運命と、友人の未亡人と孤児二人を引き取り、特にエミリーには愛情を注ぎ保護者的であり、家族に対する深い愛情に疑いがなく、エミリーが見つかった時には家庭に迎え入れるペゴティー氏率いるペゴティー一家の運命を、二隻の船で解りやすく示していると言えよう。ディケンズは、*David Copperfield* の中で「ノアの箱舟」のイメージを用いることにより旧約聖書の救済を強く印象づける一方で、新約聖書の救済—すなわち、罪の赦しもまた示している。エミリーは孤児である自身の世話をしてくれていたペゴティー氏を自身の貴婦人になるという願望により裏切ることになるが、ペゴティー氏はそのようなエミリーを赦す。このようなペゴティー氏とエミリーの関係は、後の作品 *Great Expectations* のジョーとピップの関係と類似している。自身の紳士になりたいという願望により、鍛冶屋のジョーを裏切り、ジョーのバーナーズ・イン (Barnard's Inn) 来訪に際し、「もし金で彼を完全に遠ざけておくことができたとしたら、私はきっと金をだしたことだろう。」(206) と心の中でかつてジョーを拒絶したピップであったが、このようなピップをジョーは作品の最後で完全に赦すからである。*Great Expectations* におけるジョーとピップの関係が、新約聖書の放蕩息子の話を思い起させる一方、*David Copperfield* におけるペゴティー氏とエミリーの関係はイエスと姦淫をした女を暗示している。それは、エミリーを捜し出した後の次のペゴティー氏の言葉により明らかである。

‘I took my dear child away last night,’ Mr. Peggotty began, as he raised his eyes to ours, ‘to my lodging, where I have a long time been expecting of her and preparing fur her. It was hours afore she knowed me right; and when she did, she kneeled down at my feet, and kiender said to me, as if it was her prayers, how it all come to be. You may believe me, when I heerd her voice, as I had heerd at home so playful—and see her humbled, as it might be in the dust our Saviour wrote in with his blessed hand—I felt a wownd go to my’art, in the midst of all its thankfulness.’ (724-25)

「昨夜は、あれを、わっしの宿まで連れて参りましてな」と、目を上げて、私たちの方を見ながら、彼は言い出した。「そりゃ、まあ、長い間待ちかねてたことではあり、支度もしてましただからね。それでも、わっしとわかるまでに、5、6時間はかかりましただよ。で、まあ、やっと気がつくと、わっしの足もとに膝つきましてね、まるでお祈りでもするみてえに、これまでのことを、一通り話してくれましてだよ、ね、そいで、こりゃ、全くの話ですがね、あの昔、家でふざけてばかりおりやした頃のあの頃のあの声と、全くそのままの声を聞くとだね—それも、今じゃ、イエス様が、あの土の上に字を書かれたという、あの土の上にでもするようにだな、小っちゃくなつてうずくまってるでねえかね。—わっしや、ありがてえ感謝の中にも、きゅっと胸が痛むような気がしたかね。」

引用の中のエミリーをイエスが土の上に字を書いた姿になぞらえた箇所は、ヨハネによる福音書第8章を示している。姦淫をした女がイエスの前に連れられてきたとき、イエスは身をかがめて指で地面になにかを書いていた。彼は、姦淫をした女をどう取り扱ったらよいか尋ねる律法学者たちやパリサイ人たちに「あなたがたの中で罪のないものが、まずこの女に石を投げつけるがよい」(John 8:7)と言う。これを聞いた人々は、誰も女を裁く資格がないという罪の自覚に迫られて姿を消す。人々が去った後、イエスと姦淫の女が残されるが、イエスは女に、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからはもう罪を犯してはならない。」(John 8:11)と言って彼女を赦す。第4節で律法学者たちやパリサイ人たちがする「モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」という質問はイエスにとって大変危険な質問であった。つまり、もしイエスが、この女は石で打ち殺すべきだ、モーセの律法に従え、と言うならば、罪人を赦す神を伝えていたイエスの日頃の言動とは矛盾することになる。このことにより、イエスに新しい権威を求めて集まっていた民衆が失望するという結果を招くことになる。しかし、「打ち殺してはならない」とイエスが語れば、モーセの律法を否定することになる。しかも姦淫の現場で捕らえられたこの女性は言い逃れのできない罪を犯しているのだから、その者すら赦せということになり、社会の公序良俗に反し、人々の共同体感覚を逆撫ですることになる。問題は、イエスがどうして彼女の罪を赦すことができたのかということだ。このことは、イエスが神の権威の代理者として罪の赦しを執行したと説明することができるが、イエスの赦しは、十字架上で人々の罪を贖うというほどの覚悟なしには不可能なことであった。

注目に値することは、ディケンズが *The Life of Our Lord* (1934) の第5章でマグダラのマリアへのイエスの赦しの意味を示し、「誰かが私たちに何か悪いことをしたとしても、やってきて本当に悪かったと言えればその人をいつでも赦してあげなければいけない。たとえそう言いにこなくとも、もし私たちが自分も神様に赦して頂きたいなら、私たちはやはりその人たちを赦してあげなければならないのだ。そして、決して憎んだり不親切にしてはいけないのだ¹⁶」と自身の考えを述べていることだ。このことを考慮すると、ディケンズが *David Copperfield* の登場人物ペゴティー氏のエミリーへの赦しにより、罪の赦しの意味を読者に示すだけでなく、一般の人間にも罪の赦しが可能であることを示したと言ってもいい¹⁷。

結論

以上、「船の家」の崩壊と再生という過程をたどり、ダニエル・ペゴティーの家庭の中における役割を考察してきたが、彼は、傲慢のはけ口として信仰を利用するマードストーン姉弟、「船の家」を崩壊に導いたスティアフォース、体面のためスティアフォースとエミリー

一の結婚を認めないスティアフォース夫人との比較により、彼らとは対照的な人物であり、イエスの愛と救しを実践している人物であることが解かる。

1842年アメリカ旅行から帰ったディケンズは、彼がアメリカで会ったニューイングランド (New England) の因習にとらわれないユニテリアン派の人々に影響され、ユニテリアン派のチャペルに通うようになった。彼は新約聖書の神学的意味よりも道徳的教えを強調することからユニテリアン派に惹きつけられたようである。¹⁸ディケンズは、教義に関する議論や信心深さをこれみよがしにすること、また、国教会の主教があまりに力を持ちすぎていることに反発を感じていた。¹⁹もともとユニテリアン派教会は、イギリス国教会から脱して1773年セオフィラス・リンジー (Theophilus Lindsay) によって作られたが、ユニテリアン派とは、三位一体説に反対し、唯一の神格を主張し、キリストの道徳的教えは受け入れるが、その神聖を否定する宗派の人々である。このことから、ディケンズが、キリストを理想的人間と考え、教義の中だけでキリストを理解するだけでなく、その教えを実践するところに救いがあると考えていた、と推察できる。そして、*David Copperfield* においてキリストの教えを実践する人間ダニエル・ペゴティーを描き出したと考えられる。

さらに、ペゴティー氏に関して作品の構造上見落としとしてはならないことは、第63章でペゴティー氏がエミリーとマーサのオーストラリアにたどり着いてからの第二の人生についてデイヴィッドに語ることだ。彼はエミリーに関しては、毎晩天幕の向こうへ行っては必ず祈りを捧げ、結婚しようと思えばできたにもかかわらず、悔い改めた未婚夫人となり、他者のために貢献する人物となり、マーサに関しては、若い農夫と結婚した、と伝える。さらにペゴティー氏は、ミコーバー氏のポート・ミドルベイ (Port Middlebay) 地方保安官としての成功を示すため、ポート・ミドルベイ・タイムズの記事を見せる。この記事を見ることによって、デイヴィッドはかつてともに貧困と闘ったミコーバー氏の成功を知るとともに、かつてスティアフォースの不興によりクビに追い込まれたあわれな助教師メル先生が、ポート・ミドルベイ植民地セイレム館小学校校長として、家族とともに幸福に暮らしていることを知る。ディケンズは、*David Copperfield* において、「船の家」の主人であるペゴティー氏がいかに道徳性という観点から正しい人物であることを示すだけでなく、登場人物の道徳性をめぐる因果関係を示すため、ペゴティー氏を語り手としても用いたと言っているだろう。

注

- 1 Paul Davis, *Dickens Companion*, 105.
- 2 Bert G. Hornback, “Noah’s Arkitecture”: *A Study of Dickens’s Mythology*, 67.
- 3 Davis 113.
- 4 ディケンズは、「神の目」を他の作品でも用いている。一つの例として、*A Christmas Carol*

において、悔恨と悲しみでいっぱいになっているスクルージ (Scrooge) に対し、精霊が言う「神の目には、この貧しい男の子何百人より、お前のような人間こそ生きていく値打ちもなければ、生かしておくにふさわしくもないのだぞ」という言葉が挙げられる。 [Charles Dickens, *Christmas Books*, 47.] 第3節で、ティムの寿命について尋ねるスクルージに対し、精霊は、自身が見る幻影がかわらないなら、ティムは死ぬと予言する。ティムを助けてほしいという言うスクルージに、精霊は、ティムが死ぬなら余分な人口”the surplus population (47)”が減りそのほうがいいのではないかと言う。精霊の言うこの”the surplus population”とは、第1節でスクルージが寄付金を集めていた紳士にいった言葉であった。ディケンズは、精霊に神の目からスクルージについて語らせることにより、改心前のスクルージが神の目から見て正しくないことを示している。*David Copperfield* の Daniel Peggotty の’Daniel’ という洗礼名は、ダニエル書第6章に基づく彩色画から、旧約聖書のダニエルからきた名前であると推察できる。

5 Julian Symons, *Charles Dickens*, 63.

6 Philip Collins, *Dickens and Education*, 187.

7 James R. Kincaid, *Dickens and the Rhetoric of Laughter*, 167.

8 この箇所は、*Our Mutual Friend* 第1巻第3章において、リジー・ヘクサム (Lizzie Hexam) と弟のチャーリー (Charley) がする次の会話を思い起こさせる箇所である。

‘Then as I sit a-looking at the fire, I seem to see in the burning coal—like where that glow is now—’

‘That’s gas, that is,’ said the boy, ‘coming out of a bit of a forest that’s been under the mud that was under the water in the days of Noah’s Ark. Look here! When I take the poker—so—and give it a dig—’ [Charles Dickens, *Our Mutual Friend*, 281.]

テムズ川で溺死体から金品を奪うのを生業としているギャッファー (Gaffer) と娘がボートに乗っている場面で始まる作品には、船のイメージがずっとあり、チャーリーの言う「ノアの箱舟」は、彼らの運命を暗示しているかのようである。具体的には、第4巻第6章で恋のライヴァルを排除する意図を持ったブラッドリー・ヘッドストーン (Bradley Headstone) は、ユージン・レイバーン (Eugene Wrayburn) を襲うが、リジーはかつての自身の経験によりレイバーンをボートで救う。後にリジーがレイバーンと結婚することから、その行為は彼女自身をも救い上げていると言える。一方、姉がヘッドストーンと結婚することを望み、ヘッドストーンを義理の兄とし、今まで以上に引き上げてもらいたいと期待していた利己的なチャーリーは、その期待を見事に裏切られてしまう。このことから、ディケンズが「ノアの箱舟」を登場人物の運命と関連づけていると考えられる。

9 K.J. Fielding, *Studying Charles Dickens*, 69.

- 10 Juliet John, *Dickens's Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*, 176.
- 11 「最も小さき者」とは、聖書研究者によって見解が異なるようである。宮内彰氏は、キリスト教徒中の困窮者、あるいは、全ての困窮者と説明している。(山谷省吾他編、『口語新約聖書略』)一方橋本滋氏は、通常の経済的貧者や困窮者でなく、福音の伝道者を意味する、と説明している。いいかえれば、自己を低くしてキリストに仕え、飢えみすばらしい身なりをし、定住するところなき生活を続けながら、福音を伝えた理想的キリスト者のことである。(川島貞雄他編、『新共同訳 新約聖書注解□』)文脈から考えると、ディケンズは、宮内彰氏の説明する意味で用いている。
- 12 Hornback 67.
- 13 Fielding 64.
- 14 Kelly Hager, 'Estranging *David Copperfield* : Reading the Novel of Divorce', in *ELH* vol.63. No.4., 993.
- 15 ディック・クーイマン (Dick Kooiman) は、ディケンズがエミリーとマーサとミコーバー氏をオーストラリアという新天地に移したことについて、次のように述べる。

In the final chapters of *David Copperfield*, fallen women like Emily and Martha get the opportunity to start a new life in the colonies, at the same time purifying England of their shame. The best-known example of adventures leaving for Australia undoubtedly is M Micawber from the same book. After England has failed to provide him with an employment opportunity that offers sufficient scope to all his manifold talents, he and his family embark for Australia in the firm conviction that something will turn up over there. (Dick Kooiman, 'The Short Career of Walter Dickens in India', in *The Dickensian* No.456. Vol.98. Part 1.p.14.)

- 16 Charles Dickens, *The Life of Our Lord*, 50-51.
- 17 『新共同訳 新約聖書注解□』、pp.541-42.
- 18 Davis 501.
- 19 Robert Newsom, "Unitarianism", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*, ed. Paul Schillicke, 577.

Works Cited

- Collins, Philip. *Dickens and Education*. London: Macmillan & Co. Ltd., 1963.
- Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin, 1999.
- Dickens, Charles. *Christmas Books*. New York: Oxford UP, 1994.
- . *David Copperfield*. New York: Oxford UP, 1989.

- . *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.
- . *Our Mutual Friend*. New York: Oxford UP, 1991.
- . *The Life of Our Lord*. New York: Simon & Schuster, 1999.
- Fielding, K.J.. *Studying Charles Dickens*. York: York Press, 1986.
- Hager, Kelly. “Estranging *David Copperfield*: Reading the Novel of Divorce”, in *ELH* vol.63. No.4. Johns Hopkins UP, 1996.
- Hornback, Bert • G. “*Noah’s Arkitecture*”: *A Study of Dickens’s Mythology*. Athens: Ohio UP, 1972.
- John, Juliet, *Dickens’s Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Kincaid, James R., *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Oxford UP, 1971.
- Kooiman, Dick. “The Short Career of Walter Dickens in India”, in *The Dickensian*. No.456. Vol.98. Part 1. London: The Dickens Fellowship, 2002.
- Newsom, Robert. “Unitarianism”, in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Symons, Julian. *Charles Dickens*. London: Arthur Barker Ltd., 1951.
- 小川治朗、高柳伊三郎、山谷省吾（編）『口語新約聖書略解』、日本基督教団出版部、1961.
- 川谷貞雄、橋本滋男、堀田雄康（編）高橋虔、B.シュナイダー（監修）『新共同訳 新約聖書注解』、日本基督教団出版局、1992.

The Morality of Daniel Peggotty in *David Copperfield*

YOSHIDA, Kazuho

David Copperfield (1850) is Dickens’s eighth novel, his first with a first-person narrator, published in monthly parts by Bradbury & Evans. Considered by many, starting with Forster, to be his masterpiece, it was Dickens’s own ‘favorite child’ among his novels (1867 Preface) and draws more directly than any other on events in his life. On January 1849 Dickens traveled to Great Yarmouth and talked with fishermen there. Dickens reported to Forster that Yarmouth was ‘the strangest place in the world’, and created the Peggotty family. The Peggotty family and the ‘boathouse’ they live, the product of Dickens make an unreal and fantastic impression on us.

However, the boathouse of the Peggotty family plays an important role in the structure of the novel. The boathouse is effectively used to give unity to the novel; it suggests collapse and regeneration of the family and has relation to the morality of the characters. What has to be noticed is Dickens’s autobiographical aspect of collapse and regeneration of his own family. David’s experience in Murdstone and Grinby’s is based on Dickens’s experience in Warren blacking warehouse. John Dickens, Charles father, was a cheerful person but he had no sense of economy.

John was imprisoned in the Marshalsea prison, and Charles had to work at Warren's Blacking warehouse, which gave him an agony and despair.

We can read Dickens's state of mind in Dickens's experience in Murdstone and Grinby's. It is likely that Dickens's experience in Warren's blacking warehouse made Dickens realize keenly how important family and father were. In *David Copperfield*, Dickens unexpectedly shows the importance of family and father by representing Boathouse and Daniel Peggotty, the head of the family. Bert G. Hornback suggests that Daniel Peggotty is a benevolent bachelor, not a mythological savior, but we may say that Dickens as the Omniscient used him as a character to make the plot go smoothly; Daniel Peggotty appears as a benevolent father of the boathouse when David's family is on the verge of a crisis and Mr. Peggotty tells recent conditions in the end of the novel. As Paul Davis points out that Steerforth's condescending attitude and selfish exploitation of others are contrasted to Daniel Peggotty's selflessness and love, Mr. Peggotty is distinguished by his morality compared with other characters.

At Yarmouth, Daniel Peggotty has taken in his orphaned niece and nephew, Little Em'ly and Ham, and the widow of his partner, Mrs. Gummidge. When Em'ly abandons her fiancé Ham and elopes with Steerforth, Daniel makes it his mission to find her and restore her to the family. He and his niece are united after Steerforth abandons her, but Ham is drowned while attempting to rescue Steerforth from a storm at sea. Daniel forgives Em'ly who betrayed him and eloped with Steerforth. Dickens compares the relationship between Daniel Peggotty and Em'ly to the relationship between Jesus Christ and Mary Magdalene. In the end Daniel, Em'ly and Mrs Gummidge resettle in Australia.

It must be noted that Dickens supported the efforts to encourage the poor to emigrate to Australia and, as a director of Urania Cottage, he encouraged some of the women to begin a new life there. Daniel tells David that he hears Em'ly saying of her prayers at night, she goes far to teach a child, and she goes far to tend a sick person. Dickens shows us that, Daniel Peggotty who forgives Em'ly and tells recent conditions of Em'ly and Martha in Australia in the end of the story, is not only a virtuous man but also the narrator who shows the causal relationships of the characters.

出典：『英米評論』（桃山学院大学総合研究所）19（2005）